法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

『おもろさうし』の助詞ガの表記再考

間宮，厚司 / マミヤ，アツシ

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
42
(開始ページ / Start Page)
149
(終了ページ / End Page)
166
(発行年 / Year)
2015-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010700

Hosei University Repository

『おもろさうし』の助詞ガの表記再考

間宮　厚司

はじめに

沖縄学、とりわけ『おもろさうし』研究の第一人者による、外間守善校注『おもろさうし（上・下）』（岩波文庫、二〇〇〇年）が二〇世紀末に刊行された。沖縄の古代歌謡集『おもろさうし』（一五三一～一六二三年、全二二巻、首里王府編）の文庫本化であり、待望の完訳テキストである。非常に難解な『おもろさうし』なだけに、出版に至るまでの道のりは、決して平坦でなかったと思われる。一九六五年の仲原善忠・外間守善編『校本おもろさうし』と、一九七八年の仲原善忠・外間守善著『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』（共に角川書店）が、この文庫本誕生のベースになっている。一九七二年には日本思想大系『おもろさうし』（岩波書店）を西郷信綱と共に上梓。そこで外間は、一五五四首の全オモロに頭注を付し、ほとんどが平仮名表記された原文に、語義が分かるよう極めて適切な漢字を当て本文を整えたが、それは画期的なものであった。日本思想大系と文庫本は、親子の関係にあると言えよう。沖縄学の父と言われる伊波普猷の学問を継承・発展させてきた外間の四〇年以上にわたる地道な努力が、コンパクトな文庫本二冊に結実されたことは、誠に喜ばしい出来事であった。

その岩波文庫本『おもろさうし』から、冒頭のオモロと大意を示そう。

Hosei University Repository

あおりやへ|が節
一聞得大君ぎ|や
降れて　遊びよわれば
天が下|
平らげて　ちよわれ
又鳴響む精高子|が
又首里杜ぐすく
又真玉杜ぐすく

名高く霊力豊かな聞得大君が、
首里杜ぐすく、真玉杜ぐすくに降り、
神遊びをし給うたからには、
国王様は天下を安らかに治めてましませ。
（太陽神に成り変わった聞得大君が、国王に
国を治める霊力を授ける国家的儀礼のおもろ）

（巻一―一）

右は『おもろさうし』巻一の一番のオモロであるが、傍線を付した四箇所の助詞ガの表記のされ方に注目すると、「が」と「ぎや」の二種類あることがわかる。「ぎや」については、岩波文庫本の脚注に、「格助詞「が」の口蓋化したもの」という解説が見える。そして、「ぎや」のほうは直前にイ段の仮名がある場合に限って現れるが、これは［ga］に先行する音、右の例では「きこゑ大ぎみ|」の［mi］のi母音の影響で口蓋化を起こし、［gja］になった発音を平仮名の「ぎや」で写したものであることが、従来の研究で明らかになっている。

一方、直前がイ段以外のア・ウ・エ・オ段の仮名の場合には、決して口蓋化を生じることはなく、「とよむせだかこが|」のように必ず「が」と書かれる。こうした現象については、これまでに指摘があり、特段問題はない。しかし、「てにが|」のように直前が「に」でイ段の仮名という同じ条件下にあっても、「ぎや」とは書かれず、原形の

Hosei University Repository

「が」のままの表記も散見される。

それならば、「が」表記と「ぎや」表記の割合は、『おもろさうし』全体で一体どのようになっているのか。また、歌謡と節名（「あおりやへが節」）で違いはあるのか。巻による偏りや傾向などはあるのか。重複関係にあるオモロ間で違いはあるのか。さらに、「が」と「ぎや」表記以外のものはないのか、などといった点が気になってくるが、こうした点については、従来まったく問われていなかった。そこで筆者は、拙論「『おもろさうし』における助詞ガの表記」（『法政大学文学部紀要』四一号、一九九六年三月）で、このような点について、調査・報告・考察した。そこで得られた結果を整理すると、『おもろさうし』でイ段音に直続する助詞ガの表記は左記のようにまとめられる（拙論の結論部からの引用）。

①〈口蓋化表記〉の「ぎや」と〈非口蓋化表記〉の「が」の比率は、歌謡では五八対四二、節名では七対九三である。これは謡われる歌謡と書かれる節名によって生じた差であろう。

②〈口蓋化表記〉は歌謡では全二二巻にわたって見えるが、節名では半数の一一の巻にしか見えない。この結果も歌謡と節名の性質の差に基づくものと考えられる。

③〈口蓋化表記〉の割合が最も高い巻は歌謡・節名共に巻一であるが、それは巻一だけが一五三一年の成立で、そこに理由が存すると思われる。また、王府オモロの巻は、〈口蓋化表記〉率が高いが、これはオモロの詠唱・表記法に関わる問題に相違ない。

④重複オモロ間にも「が」「ぎや」表記の揺れが見える。また、助詞ガの表記には、「が」「ぎや」以外に「や」もある。ただし、助詞ハを書いた「や」もあるので、その点は慎重に見極めなければならない。

Hosei University Repository

①～④の詳細については拙論を参照していただくとして、本稿では右の③〈口蓋化表記〉の割合が最も高い巻が、歌謡・節名共に巻一である点について、最初に考察したい。なお、節名は「が」表記が三例、「ぎや」表記も三例と少ないため、あれこれと論じることはできない。したがって、巻一の歌謡で、「が」表記三例（六・八％）に対し、「ぎや」表記四一例（九三・二％）になっている理由をまず明らかにし、そこから派生した問題についても論じようと思う。

一

「はじめに」で示した冒頭のオモロの「きこゑ大きみぎや」の「ぎや」表記は、「きこゑ大きみが」の「が」表記の例も見える。そこで最初に、〈聞得大君＋助詞ガ〉の表記が、『おもろさうし』全二二巻の中で、どのくらい存在するのかを以下に一覧する。本稿の本文は、岩波文庫本に従い、「が」表記は▽印で、「ぎや」表記は▼印で記す。また、用例の所在は、［巻三―一二二①］で、第三巻の一二二番オモロ（通巻番号）の一行目に存することを示す。

A〈聞得大君＋助詞ガ〉の全例

▽きこゑ大ぎみが↓計八例［巻三―一二二①・巻一三―八五二①・八五四⑩・八六三①・八七六①・八七七①・巻二一―一四一三①・巻二二―一五二三①］

▼きこへ大ぎみぎや↓計三例［巻一―二一①・巻七―三六二⑧・巻一三―七六三⑰］

▼きこゑ大ぎみぎや↓計一三四例［巻一―一①・二①・三①・四①・五①・六①・七①・八①・九①・一〇①・一一①・一三①・一四①・一五①・一六①・一七①・一八①・一九①・二〇①・二二①・二四①・二五

Hosei University Repository

①・二六①・二七①・二八①・三〇①・三一①・三三①・三四①・三五①・三七①・三八①・三九①・四一⑥・巻三―八八①・九一①・九三①㉛・九四①・九五①・九六①・九八①・九九①・一〇二①・一〇三①・一〇五①・一〇八①・一〇九①・一一〇①・一一二①・一一三①・一一四①・一一五①・一一六①・一一七①・一一八①・一一九①・一二〇①・一二一①・一二三①・一二四①・一二五①・一二六①・一二七①・一二八①・一二九①・一三一①・一三二①・一三三①・一三四①・一三五①・一三六①・一三七①・一三八①・一三九①・一四〇①・一四一①・一四二①・一四三①・一四四①・一四五①・一四六①・一四九①・一五〇①・巻五―二七九⑪⑯・巻七―三四五①・三四六①⑭・三四七①・三四八①・三四九①⑨⑮・三五二①・三六〇①・三六三①・三六四①・三六六①・三六七①・三六八①・三八七①・三八八①・巻九―五〇八①・巻一〇―五一八①・五二九①・巻一一―五六一①・巻一二―六五二①・六五三①・六五四①・六五七①・六五八①⑫・六六〇①・六六一①・六九四①・六九五①・七一二①・七二二①・七二三①・七二六①・七二七①・七三二①・七三五①・七四〇①・巻二一―一四五六①・巻二二―一五〇九①・一五一七①・一五一八①・一五二一①・一五三〇①・一五三三①・一五三九①・一五四四①]

▼きこゑ大君ぎや↓計一例［巻三―一〇七①］

右の例から、〈聞得大君＋助詞ガ〉は、「が」表記（「きこゑ大ぎみが」）が計八例であるのに対して、「ぎや」表記（「きこへ大ぎみぎや」「きこゑ大ぎみぎや」「きこゑ大君ぎや」）は計一三八例も存する。「が」表記五％、「ぎや」表記九五％という割合になっている。つまり、〈聞得大君＋助詞ガ〉は、そのほとんどが、「ぎや」表記ということになる。

そして、巻一の〈聞得大君＋助詞ガ〉は三五例あり、すべて「ぎや」表記である。巻一の歌謡部分における助詞ガ

Hosei University Repository

は、拙論「『おもろさうし』における助詞ガの表記」（前掲）によれば、「が」表記が三例で、「ぎや」表記が四一例である。ということは、巻一では、「ぎや」表記の四一例中、三五例を「聞得大君＋ぎや」が占めていることになる。こうした事実が判明した以上、かつて筆者は拙論で、「〈口蓋化表記「ぎや」〉の割合が最も高い巻は巻一だが、巻一だけが一五三一年の成立で、そこに理由が存すると思われる」などと書いたが、巻一は〈聞得大君＋助詞ガ〉の例が大多数を占めるので、「ぎや」表記の比率が高くなったと見直すべきで、ここで訂正したい。拙論では、助詞ガの上にどのような語があるのか、という視点から分析していなかったために、こうした点に気づかなかった。

それでは、同じく冒頭のオモロにある「てにがした」はどうか。次に示そう。

B〈天＋助詞ガ＋下〉の全例

▽てにが下（天が下）→計一例［巻一二―七三五⑫］

▽天がした（天が下）→計二例［巻五―二三一⑮・二六二③］

▽天が下（天が下）→計七例［巻三―九七㊳・一一九③・巻七―三五一③・巻一三―八三五②⑤・八四六④・八七七㉗］

▽てにがした（天が下）→計一例［巻一―一③］

▼天ぎやした（天が下）→計三例［巻五―二三八③・二八六⑭・巻一二―七四二⑫］

▼天ぎや下（天が下）→計三例［巻三―一〇一㉒・巻一二―七四一③・巻一三―八七七④］

▼てにぎやした（天が下）→計一例［巻九―四九〇㉗］

▼てにぎや下（天が下）→計一例［巻一―三一④］

▼天ぎやした（天が下）→計一例［巻三―一〇〇㉗］

Hosei University Repository

右の例から、〈天＋助詞ガ＋下〉は、「が」表記（「てにが下」「天がした」「天が下」「てにがした」）が計一一例あるのに対して、「ぎや」表記（「天ぎやした」「天ぎや下」「てにぎやした」「てにぎや下」「天ぎやした」）は計九例ある。〈天＋助詞ガ＋下〉の場合は、「が」表記五五％、「ぎや」表記四五％という割合で、それほどの差はないが、「が」表記のほうが若干多くなっている。

以下、本稿では、助詞ガに上接する語の中でも、特に用例の多い、キミ（君）とオソイ（襲）の語に注目して、「が」表記と「ぎや」表記がどのような割合になっているのか、調査・報告したい。

二

それでは、本稿の「一」で見た〈聞得大君＋助詞ガ〉を除いた〈…君＋助詞ガ〉について見てみよう。

C〈大君＋助詞ガ〉の全例

▽大きみが→計六例［巻三―一一一⑧・巻一一―六二八①・巻一三―八六四①・八六五①・八八八③・巻二一―一四五七①］

▼大きみぎや→計二二例［巻一―一二②・二三①・巻三―一〇六①・一三〇②・一五一①・巻四―二〇八⑮・二一一⑮・巻五―二八五⑥・巻六―二九四⑮・二九七⑮・三四四⑭・巻九―四八八②・五〇一②・巻一〇―五一五①・五一六①⑧・巻一二―六五九①・七二一①・七四一①・七四五⑮・巻二〇―一三七七⑮・一三八〇⑮］

Hosei University Repository

D〈首里大君＋助詞ガ〉の全例

▽しより大きみが↓計一例［巻一二―七二四①］

▼しより大きみぎや↓計一七例［巻四―二〇六①・二〇七①・二〇八①・二〇九①・巻六―二九一①・二九二①・二九三①・二九四①・二九五①・巻一二―七三八①・七四四①・巻二〇―一三七四①・一三七五①・一三七六①・一三七七①・一三七八①・巻二二―一五二二①］

▼首里大きみぎや↓計三例［巻三―八九①・巻四―二〇五①・巻一二―六六二①］

E〈鳴響む大君＋助詞ガ〉の全例

▽とよむ大きみが↓計一例［巻一二―七二五⑤］

▼とよむ大きみぎや↓計三例［巻四―一九九⑥・二〇二⑤・巻一二―七三七⑤］

F〈照る君＋助詞ガ〉の全例

▼きこゑてるきみぎや↓計二例［巻七―三五八①・三五九①］

▼とよむてるきみぎや↓計一例［巻七―三五八④］

G〈世寄せ君＋助詞ガ〉の全例

▼くめのよゝせきみぎや↓計一例［巻一二―七〇七①］

▼せだかよゝせきみぎや↓計一例［巻一二―七〇七⑤］

Hosei University Repository

H〈君＋連体助詞ガ＋体言〉の全例

▽きみがくぎ（君の釘）→計一例［巻六―三三三⑫］

▽きみがけおのうち（君の京の内）→計二例［巻一九―一三一八③・巻二〇―一三八一③］

▽きみが金うち（君の金内）→計二例［巻一九―一三一九③・巻二〇―一三八二③］

▽きみがとで（君の門）→計一例［巻三―一〇一⑱］

▼きみぎやいのち（君の命）→計一例［巻一二―六六四③］

▼きみぎやこがねすへ（君の金精）→計一例［巻四―一九九④］

▼きみぎや金物のぐすく（君の金物の城）→計一例［巻一四―一五〇③］

▼きみぎやすへ（君の精）→計一例［巻一二―七四二②］

▼きみぎやせぢ（君の霊力）→計一〇例［巻三―一〇〇㉖・一一三④・巻四―二〇六③・巻六―二九二③・巻九―四九〇㉖・巻一二―六九四④・七〇七③・七四二⑤⑪・巻二〇―一三七五③］

以上、本稿の「一」と「二」で列挙した〈…君＋助詞ガ〉と〈天＋助詞ガ＋下〉について、その総計を一覧すると、次のようになる。

A〈聞得大君＋助詞ガ〉→▽「が」八例・▼「ぎや」一三八例

B〈天＋助詞ガ＋下〉→▽「が」一一例・▼「ぎや」九例

C〈大君＋助詞ガ〉→▽「が」六例・▼「ぎや」二二例

Hosei University Repository

D〈首里大君＋助詞ガ〉→▽「が」一例・▼「ぎや」二〇例
E〈鳴響む大君＋助詞ガ〉→▽「が」一例・▼「ぎや」三例
F〈照る君＋助詞ガ〉→▽「が」〇例・▼「ぎや」三例
G〈世寄せ君＋助詞ガ〉→▽「が」〇例・▼「ぎや」二例
H〈君＋連体助詞ガ＋体言〉→▽「が」六例・▼「ぎや」一四例

右の結果から、B〈天＋助詞ガ＋下〉以外は、すべて「ぎや」表記のほうが多くなっているということが明らかになった。要するに、ACDEFGHの〈キミ（君）＋助詞ガ〉の総数は、「が」表記が三三例に対して、「ぎや」表記が二一一例で、七倍弱も多いのである。

三

それでは逆に〈…君＋助詞ガ〉で、「が」表記のほうが多いという例はあるのだろうか。調査した結果、「二」では取り上げなかった〈精の君＋助詞ガ〉は、「が」表記のほうが「ぎや」表記よりも多い極めて珍しい例であることが判明したので、列挙しよう。

I〈精の君＋助詞ガ〉の全例

▽せのきみが→計三例［巻一一―六三一①・巻一三―七八七④・巻二一―一四七〇①］
▽せんきみが→計六例［巻一一―六三二①・巻一二―七一〇①・七一一①・巻二一―一四九一①・一四九二

Hosei University Repository

①・巻二二―一五一〇①]

▽きこへせのきみが↓計一例[巻一三―八八一①]

▽きこゑせのきみが↓計一三例[巻一三―七八五①・七八六①・四三七八八①・八八〇①・巻二一―一四〇四①・一四〇八①・一四三六①・一四三七①・一四四一①・一四五九①・一四六八①・一四八二①・一四九五①]

▽きこゑせんきみが↓計二例[巻一二―六九一①・七一三①]

▽とよむせのきみが↓計一三例[巻一一―五七四③・巻一三―七八五⑤・七八六③・七八八③・八八〇③・八八一③・巻二一―一四〇八④・一四三六④・一四五九③・一四六八④・一四八二⑤・一四九四④・一四九五③]

▽とよむせんきみが↓計一例[巻一二―六九一④]

▼せぬきみぎや↓計一例[巻九―四七八①]

▼きこへせのきみぎや↓計一例[巻一一―六二四①]

▼きこへせんきみぎや↓計二例[巻四―二一〇①・巻二〇―一三七九①]

▼きこゑせのきみぎや↓計六例[巻三―九〇①・巻九―五〇九①・巻一一―六二〇①・六二二①・巻二一―一四〇六①・一四九四①]

▼きこゑせんきみぎや↓計八例[巻四―二一一①・巻六―二九六①・二九七①・巻一一―五七四①・巻一二―六六五①・七三九①・七四五①・巻二〇―一三八〇①]

▼とよむせのきみぎや↓計八例[巻九―五〇九③・巻一一―五九四③・六二〇④・六二二③・六二四⑤・巻二一―一四〇六②・一四〇七④・一四三七③]

Hosei University Repository

▼とよむ世のきみぎや→計一例［巻一一―六二一③］
▼とよむせんきみぎや→計一例［巻一二―七一三⑤］

右の〈精の君＋助詞ガ〉は、「が」表記が三九例に対し、「ぎや」表記は二八例で、「が」表記のほうが多い。割合は、「が」表記五八％、「ぎや」表記六二％である。

そこで、〈…大君＋助詞ガ〉と〈…精の君＋助詞ガ〉を比較してみよう。「大君」と「精の君」に助詞ガが続いた場合、助詞ガの上は同じ「きみ」だが、どれほどの違いが出るのか、表記の相違点もわかるように分類し、一覧してみる。

イ〈大君＋助詞ガ〉と〈精の君＋助詞ガ〉

▽大きみが→計六例
▼大きみぎや→計二二例

▽せのきみが→計三例
▽せんきみが→計六例
▼せぬきみぎや→計一例

ロ〈聞得大君＋助詞ガ〉と〈聞得精の君＋助詞ガ〉

▽きこゑ大ぎみが→計八例
▼きこへ大ぎみぎや→計三例
▼きこゑ大ぎみぎや→計一三四例
▼きこゑ大君ぎや→計一例

▽きこへせのきみが→計一例
▽きこゑせのきみが→計一三例
▽きこゑせんきみが→計二例
▼きこへせのきみぎや→計一例

Hosei University Repository

▼きこへせんきみぎや→計二例
▼きこゑせのきみぎや→計六例
▼きこゑせんきみぎや→計八例

ハ〈鳴響む大君＋助詞ガ〉と〈鳴響む精の君＋助詞ガ〉

▽とよむ大きみが→計一例
▼とよむ大きみぎや→計三例

▽とよむせのきみが→計一三例
▽とよむせんきみが→計一例
▼とよむせのきみぎや→計八例
▼とよむ世のきみぎや→計一例
▼とよむせんきみぎや→計一例

以上、イロハを合算すると、〈…大君＋助詞ガ〉は「が」一五例（八％）、「ぎや」一六三例（九二％）に対して、〈…精の君＋助詞ガ〉は「が」三九例（五八％）、「ぎや」二八例（四二％）である。このように、助詞ガの上接語が「…大君」と「…精の君」で、なぜ「が」と「ぎや」の表記の比率が、これほど異なるのであろうか。中でも、A〈聞得大君＋助詞ガ〉の「が」八例（五％）、「ぎや」一三八例（九五％）と、〈…精の君＋助詞ガ〉の「が」一六例（四八％）、一七例（五二％）の違いは、一体どうしてなのか。こうしたの問題について、筆者には現時点で答えることはできない。

Hosei University Repository

四

キミ（君）についての調査・報告を終えたので、引き続き、用例数の多い、オソイ（襲）について、見ていくことにする。

J〈接司襲い＋助詞ガ〉

▽あぢおそいが↓計二九例［巻四―二〇九⑦・巻五―二八〇⑦・二八二⑥・二八三⑤・二八四⑤・二八六⑧・二八七④・二八八⑤・巻七―三八一③・巻一一―五七六⑨・六四七⑤・巻一二―七二二⑦・巻一三―七五二③・七八七⑥・八〇二③・八〇四④・八〇五④・八〇八④・八九一⑤・巻二一―一四一七⑥・一四一八⑪・一四一九⑨・一四三九⑫・一四五四⑫・一四五五④・一四六〇⑨・一四七四⑥・一四九一⑰・一四九七㉞］

▽あんじおそいが↓計二五例［巻三―九四㉜・一一四④・巻六―二九五⑦・巻一一―五八七⑥・五九三⑧・五九九⑥・六〇〇⑧・六〇一⑥・六一七⑫・六二五⑧・六三一⑧・六三四⑩・巻一二―六五四⑫・六五九⑦・六九四⑬㉕・六九五⑧・七一八⑤・七二七⑪・巻一三―七四八⑤・九六一⑥・九八〇④・巻一七―一一八四③・巻二〇―一三七八⑦・巻二一―一三九九③］

▼あぢおそいぎや↓計一〇例［巻三―八八㉜・巻五―二五七⑤・二八一⑥・巻七―三六七③・三八四①・巻一二―七四四⑦・巻一三―七六二⑥⑩・九〇〇①・九四八⑬］

▼あんじおそいぎや↓計一六例［巻四―二〇二⑪・巻七―三六九⑫・三八四④⑥・巻九―四七六④・四七八⑤・四八九⑦・巻一二―七四〇⑩・巻一三―八九四③・巻一四―九九二②・一〇二〇③・一〇二一③・一〇二二③⑦・巻一六―一一六四⑤・巻一九―一二九三③］

Hosei University Repository

K〈…按司襲い＋助詞ガ〉

▽きこへあぢおそいが↓計三例［巻五―二七九①⑥・巻一一―五七九④］

▽きこゑあぢおそいが↓計八例［巻四―一七三⑥・巻五―二二〇①・巻一一―五七三⑦・巻二一―一四五四⑥・一四五八⑦・一四七一⑤・一五〇四④・一五〇五⑤］

▽きこへあんじおそいが↓計二例［巻一一―五七七⑤・六三八⑤］

▽きこゑあんじおそいが↓計二例［巻一一―五八〇⑤・六四四⑤］

▽くめのあんじおそいが↓計一例［巻一二―七〇三⑤］

▽とよむあぢおそいが↓計一四例［巻五―二七九④⑨・巻一一―五七三⑧・五七七⑥・五七九⑤・五八〇⑥・六三三⑤・六三八⑥・六四四⑥・巻一二―一四五四⑧・一四五八⑨・一四七一⑦・一五〇四⑤・一五〇五⑥］

▽とよむあんじおそいが↓計二例［巻七―三八九⑥・巻一三―八五二⑬］

▼きこへあぢおそいぎや↓計二例［巻五―二二一①・二八五⑫］

▼きこゑあぢおそいぎや↓計二例［巻三―一〇一①・巻二一―一四四八⑦］

▼きこへあんじおそいぎや↓計一例［巻七―三四六⑲］

▼きこゑあんじおそいぎや↓計五例［巻一―一七⑥・巻七―三四六⑧・三八九①・巻一一―六三三④・巻一三―九五五⑲］

▼とよむあぢおそいぎや↓計三例［巻五―二二〇⑤・二二一⑤・巻二一―一四四八⑩］

▼とよむあんじおそいぎや↓計三例［巻一―一七⑧・巻七―三四六⑪・巻一三―九五五⑳］

Hosei University Repository

Ｌその他の〈…襲い＋助詞ガ〉

▽きこゑくにおそいが↓計二例［巻一一―六〇九①・巻二一―一四二九①］
▽くめの大おそいが↓計一例［巻一二―七〇三①］
▽てりおそいが↓計一例［巻一三―八二八④］
▽とよむくにおそいが↓計六例［巻六―二九一②・巻一一―六〇九⑤・巻一二―六六二②・七二四⑤・七二六⑤・巻二一―一四八五⑦］
▼いちのともおそいぎや↓計一例［巻九―五〇五⑩］
▼けう有くにおそいぎや↓計一例［巻二〇―一三五〇⑤］
▼せだかきみおそいぎや↓計一例［巻一―三二⑤］
▼せやるくにおそいぎや↓計一例［巻二〇―一三五〇①］
▼とよむくにおそいぎや↓計九例［巻四―二〇五②・二〇九⑤・巻六―二九三⑤・二九五⑤・巻一二―七三八⑤・七四四⑤・巻二〇―一三七六⑤・一三七八⑤・巻二二―一五二二②］
▼とよむ國おそいぎや↓計二例［巻三―八九⑤・巻四―二〇七⑤］

これらの例から、〈…襲い＋助詞ガ〉（ＪＫＬ）は、「が」表記が九六例（六三％）に対し、「ぎや」表記は五七例（三七％）である。なお、すでに一覧した〈…君＋助詞ガ〉（ＡＣＤＥＦＧＨＩ）は、「が」表記が六一例（二一％）に対し、「ぎや」表記は二三〇例（七九％）となる。この結果から、〈…君＋助詞ガ〉は「ぎや」の表記率が五八％高く、〈…襲い＋助詞ガ〉は逆に「が」の表記率が二六％高いことがわかる。こうした現象は、なぜ生じたのだろうか。残念ながら、現時点では未詳としか言えない。

Hosei University Repository

ただ、こうしたデータを通覧すると、気づくことがある。拙論「『おもろさうし』における助詞ガの表記」（前掲）では、「ぎや」表記の最も少ない巻は巻一一で二二・四％であることを一覧表で示したが、本稿で調査した〈…襲い＋助詞ガ〉を通覧し確認すると、「が」表記は巻一一に二六例あるものの、「ぎや」表記は巻一一に一例しかない。こうした偏りが巻一一の「ぎや」表記率の低さの一因となったことは間違いないであろう。ただしなぜ、こうした偏りが起こったのか、その理由は不明である。

おわりに

本稿で述べた内容が、『おもろさうし』研究にどれだけ寄与するかは不明である。けれども、こうした問いを誰も発しないというのも問題であろう。同じ語が助詞ガの上にある場合に、どうして「が」と表記されたり、「ぎや」と表記されたりして、揺れ動くのであろうか。筆者の答えは、小著『沖縄古語の深層』（森話社、二〇〇八年）にこう記した。以下は、一八六頁からの引用である。

助詞ガは、直前にア・ウ・エ・オ段の仮名がくる場合は「が」表記のみで、「ぎや」表記には絶対にならない。また、イ段の仮名がくる場合は「が」と「ぎや」両表記が見出せる。こうした書き分けは、実際に発音された音を聞いたとおりに書き写した結果と解する以外にあるまい。

助詞テは、四段動詞の連用形に接続する際、カ・サ・タ行の場合は「ちへ」表記、ハ・マ・ラ行の場合は「て」（マ行は「で」）表記になるが、この截然たる書き分けも助詞ガの表記と同様、方言的な音を積極的に仮名文字にとどめたものと察せられる。

Hosei University Repository

助詞ガやテの使用頻度は極めて高い。にもかかわらず、表記を一つに定めなかったのは、むしろ方言的な発音を、ありのままに記録しようとする強い意志が感じられる。仮に大和的な表記に整える作業を徹底したとするならば、「ぎや」や「ちへ」といった方言色の濃い表記は採用されなかっに違いない。

本稿で得られた調査結果からも、右の記述を改める必要はない。むしろ、より一層なぜ「が」と「ぎや」の表記が見られるのか、なぜ「が」表記に統一しなかったのか。そうした理由を明らかにしたいとの思いが強まった。今後の課題は、『おもろさうし』における助詞ガの上接語別「が」「ぎや」表記について、全面的な徹底した調査を行い、その全貌を明らかにし、そうなっている理由をできるならば、解明したい。

本稿の研究動機は、『おもろさうし』の言語（本稿では助詞ガの表記）に関する研究の可能性を広げたいとの思いからのものである。それにしても、なぜ、A〈聞得大君＋助詞ガ〉の「ぎや」表記率が著しく高く、J〈按司襲い＋助詞ガ〉は「ぎや」表記率が低くなるのだろうか。その理由はわからないものの、前稿「『おもろさうし』における助詞ガの表記」（『法政大学文学部紀要』四一号、一九九六年三月）では明らかにすることができなかった、巻一の「ぎや」表記率が最高になった理由は、〈聞得大君＋助詞ガ〉の多さにあること、および巻一一の「ぎや」表記率が最低になった理由は、〈按司襲い＋助詞ガ〉の多さにあることを指摘することができた。

言語研究には、事実は明らかになっても、その理由は不明という場合がよくある。引き続き、本稿のような調査と考究を重ねたい。